

ルカによる福音書 #03
【おめでとう、恵まれた方】

1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。
1:27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。
1:28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」
1:29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。
1:30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。
1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。
1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。
1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」
1:34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」
1:35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。
1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。
1:37 神にできないことは何一つない。」
1:38 マリアは言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

先週はザカリヤに起こった不思議なことを見ました。
今週はマリアの出来事です。

1) おめでとう、恵まれた方 1:28

御使いがマリアに顕われて最初に発した言葉は「おめでとう」「喜べ!」という言葉です。それに続いて「神から恵みを授けられた人」というものでした。
御使いの挨拶に戸惑っているマリアにまたもや同じ言葉が届きます。
「こわがることはない。マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」 1:30

実はザカリヤの時もそうなのですが、奇跡と思われる出来事のすべては、「神様の恵みのわざ」「神の憐れみの心からの出来事」なのです。神様の出来事です。
「神から恵みを授けられた」とか「神から恵みを受けた」という言葉が、私たちの耳には慣れてしまっていないでしょうか？

ところで、マリアにここで語られた「恵み」とは「イエスの母」になることであり、結婚前に子供を産むことであり、社会的には大問題に発展してしまう可能性のある重大事件です。
おそらく、ヨセフが理解してくれるかどうか心配はあったでしょうし、もし理解が得られなければ離縁かそれこそ石で打ち殺される心配さえあったはずです。

私たちは「神の恵み」を喜ぶことを当たり前のようには考えていますが、神様の恵みは必ずしも最初から私たちの「喜び」につながらない事々も数多くあります。つまり一見「恵み」とは考え難いことも多くあるのです。
マリアは信仰によってそれをとらえ、聖霊によって喜ぶのですが、即座にそれができたわけではありません。

この一連の出来事はマリアにとっては、考えてもいないことであり、マリアの都合から言えば好ましいものではなかったとも思えます。
「恵み」がそういう状況をもたらすことを、知っておくことは大事です。
そうでないと、恵みはことごとく自分に都合の良い好ましい出来事ととらえてしまいやすいので、本来の恵みの姿が見えなくなる恐れがあります。神が私たちを生かし、私たちに対して、あるいは、私たちを通してなさろうとするわざは、ひとつひとつが恵みのわざなのだと思えます。最終的に、あー、神様がなされたのだなとうなずけるか

らです。

2) 神にできないことは何一つない。」(1:37)

マリヤは驚き、迷い、質問します。しかしこの姿勢はザカリヤの姿勢とは違います。一生懸命わがろうとする姿勢でいるのです。

何がそんなに大きな喜びなのか、恵みなのか、どうして婚約者と性的関係ももっていないのに「子供を産めるのか」当然と言えば当然な疑問です。こういう戸惑いや、悩みや心の揺れというのは、あって当然です。

クリスチャンには悩みがないとか、神様を絶対的に信頼しているので不安はまったくないとかいう言葉を聞くことがあります。大変危険な言葉です。おそらく、「私は何も考えていません。」という告白と一緒にかもしれません。

悩むことや不安になることは悪いことではありません。

むしろ当たり前のことであり、そういうプロセスの中でこそ、本当の自分を発見することにあります。そしてまた、神様の助けが必要なこともうなずけるのです。

極端な言い方をすれば、不安と心配の心を持っているからこそ、真剣に御言葉を受け取ろうと思えるのかもしれませんが。

考えることを止めてしまうとか、悩むことを軽蔑視してしまうのは危険です。それはもう完全に人であることを止めているのと同じだからです。

御使いのマリヤへの言葉は大胆なものでした。

「神にできないことは何一つない。」1:37
あるいは、「神の言葉には不可能は何一つないのだから」とも訳せる言葉だと言われます。

神様のイニシアチブで何かを始められたのなら、不可能のない神様は必ずそれを成し遂げてくださるということになります。神様が確かにそれを「語られたのなら」きっと神様はそれを実現してくださるということです。

しかし、「神にできないことは何一つない」とか

「神にとって不可能はない。」という言葉ほど教会の中で人に誤用され、人を利用する言葉として使われた言葉はないかもしれません。

「私たちは、この企画を立てました。それを実現するには5億円くらいのお金が必要です。でも神様には不可能はありませんから大丈夫だと信じます。信じていきましょう。あなたも今までの献金額の倍はささげられるはず。神様はそれを可能にしてくださいませ。」

問題はこの企画が「神様」から出ているかどうかです。こういう言葉を神様が本当に語られるのかわかりません。「誰の栄光を現そうとしているのか」と言うところもチェックが必要です。

「神様に不可能はない」ということと「この企画は大丈夫」という関係が本当に成り立つのかわかりません。じっくり考えなければなりません。

確かに神様には不可能はないのです。しかし、それは神様ご自身のみわざを進めるに当たっての発言であり、私たちの身勝手を助けるための発言ではありません。

3) おことばどおりこの身になりますように。
1:38

1:38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」

マリヤの応答は、謙遜な礼拝と服従でした。私は小さな、貧しい「しもべ」です。「はしため」とは、いわば「女奴隷」という言葉です。あなたのお言葉どおりに、この身になりますように。
マリヤの信仰がここに表明されています。

聖なる神様の言葉に触れ、神様はご自分の栄光のために、マリヤをとおしてこれを成し遂げようとしておられるということがわかった時、マリヤは礼拝のところで、自分自身をささげるのです。

私たちの生活の中で、神様からは声がかかっているのに

「私は、ちいさなしもべです。あなたの最善が私をとおしてなされますように。わたしの心と体を

お用いください」となかなか言えないことが、成長を妨げる一番大きな壁かもしれません。

どうしても「わたしを恵み、わたしを祝福し、わたしに良い思いをさせてください。できましたら、私だけ、わたしの家族だけを祝福してください」という願いが最優先事項になってしまっていないでしょうか。

これは人間的には自然であり、当然なのですが、その部分が信仰によって少しずつ取り扱われて行くのです。

神様から、ある行為や行動が求められる時、たとえば、あの人と和解しなさいとか、あの人にこれを届けなさいとか、誠実に生きなさいとか、これは私に返しなさいとか、赦してあげなさいとか、そのとき、私に多少の不都合があっても、本当に神様の言葉がそう言っているのなら

「わかりました。そのとおりにいたします。おさげします」と言えないと心の平安はなかなか訪れません。

そこにこそ、あなたの信仰が輝く場があるのです。そこにこそ、神様には「不可能がないのだ」と言い聞かせ、それを信じて進むことが求められるのです。

今朝、静かに祈りましょう。

私は不可能だと思っていた、あの人への祝福、あの人を赦すこと、あの人を愛すること、主よ、それがあなたの願いであるなら、あなたには不可能がありませんから、私に多少の不都合があっても、その道に進ませてください。

「私はここにいます。主よ、わたしにあなたの思い通りのことが起こりますように！」

それは「主の祈り」の中の言葉、心と一緒にです。

「みこころが天に行われる通り、地にも行われますように」という祈りの心はそこにあります。

礼拝における説教、賛美、祈りがそういう心を育て、養うために有益であればと願います。祝福を心から祈ります。

関根一夫

「MACF礼拝映像」はこちらです。

https://youtu.be/NUj_sW44KSY